

里唄

— 七尾まだらを伝承する —

長 憲二

聞き手・石渡陽子 上野奏笑 岡田紀笑 (石川県立七尾高等学校1年)



三味線を使って演奏している風景

自己紹介

僕は、^{ちようけんじ}長憲二です。誕生日は昭和14年10月5日の74歳。家族構成は家内睦子、^{みねひさ}長男が峰久、^{やすくに}二男が恭邦、^{まみ}長女は満美の5人家族。

18歳の頃からまだらに携わってきて、高校卒業してから地区の公民館の役員をしていた。それから、製菓衛生士という資格を取って25、26歳の時にお菓子製造をやっていて、結婚をしたのが27歳の時で、31歳まで製菓衛生士をやっていた。31歳から市議員、42歳の時に石川県の県議員になった。その現職の間ですね、47歳の時から68歳か69歳まで七尾市の体育協会会長をしていました。

今の、この七尾まだらの会長というのは、36歳の時に、まだらの保存会の会員になって、54歳の時に会長に就いて今年で20年になります。

七尾まだらとは

七尾まだらとはね、祝い唄なんですよ。ご祝儀の時の唄だとか、お祭りだとか、そういう時、唄われる唄がまだらなんですよ。それから、地域にとってはシンボリックな唄ですよ。また、和倉温泉の加賀屋なんかでは、お客さんが宴会をする前にショーとして七尾まだらを披露しています。だから、もてなしの唄でもあるわけですね。また、使っている楽器は三味線と尺八です。使う楽器の数は特に決まっていません。

七尾まだらの特徴

七尾まだらの歌詞はね、「めでためてたの若松様よ、枝も栄える葉も茂る」たったこれだけの歌詞なんですよ。そして、まだら始めてから終わるまで4分10秒の間に手拍子77回叩くんです。七尾まだらっちゅうのは、歌詞はものすごく短



(左) 七尾まだら音頭を踊っている様子 (加賀屋一人一芸会)
 (上) 保存伝承師の資格を持つ団体の舞台
 (下) 魚町のでか山保存会舞台

い、たったこれだけのセリフなんだけど、母音を長々と引っ張って唄うのが特徴なんです。踊りの方ではなく、短い歌詞を引っ張って唄うという特質があるもんだから、石川県の無形文化財の指定を受けとるんです。

歌詞の意味

七尾まだらの歌詞の「めでためでたの若松様よ、枝も栄える葉も茂る」というのは、鉢に山から採ってきた苗木の松を植えて水をやり、土を肥やして、成長してくる枝ぶりのいい枝に松の葉が茂る。これは、枝ぶりも葉の勢いも成長して、立派に育てられた松が、人間にも例えられるというわけです。みんなの気持ちが込められとるもんです。

七尾まだらの歴史

まだらというのは、仏教の曼荼羅^{まんだら}からきたんではないかという説もあります。それから佐賀県の五島列島の馬渡島からきたんではないかという説もありますけど、定かではないですね。由来は。昔は陸上交通が大変な時代だったから、海上交通でしょ。海の神山の神という海上交通の安全であったり、魚が大漁に捕れますようにと、海の神様にお願いする。それで、船乗りたちが、荒れた日に港に停泊して休んでいた時に、海上交通の安全だとか祈願をして唄われたというのが、まだらではないかといわれている。さらに、舟おこしと言って、旧暦の2月11日に漁師の人たちが初めて船を出して漁にでたり、荷役作業をしたりすることをいう、そういうときも、安全祈願や大漁を期待しながら、まだら節を唄っ

たといわれておるわけやね。

昔の七尾まだらは楽器なしで唄だけだったんです。近代になってから、尺八とか三味線とかを入れた。振り付けはそれぞれの地域の自由で、どんなものでもいいんです。ところが今はまだら節が文化財として指定を受けている以上、その楽器や振り付けを変えるわけにはいかん。ただ踊りというのは文化財に指定されとるわけじゃない。古来の伝統的な節まわしは大事にしなきゃならん。

まだらの日

今、能登には2つの「まだらの日」があるんです。

1つは、7月18日の「七尾港まつり」の日です。御祓川の河畔に七尾まだらの石碑ができて、今年で52年経つんです。そこで、一昨年の50年を境に、先輩方の皆さんに「これが七尾で息づいている伝統芸能のまだらです。しっかりと保存して、普及・伝承のために頑張っていきます」という誓いを立てる。そんな日にしたんです。

もう1つは、年末12月23日の日に行う「千人が唄う能登の第九、まだら」です。これは、1年おきに踊りや唄などを練習している人達のまだらをおりまぜて大合唱しようというものです。1年を振り返り、みんなで新しい年を祝福して迎えようという意味をこめてやってるのがねらいです。

今、能登に2つの「まだらの日」ができて、能登の風物詩になるという捉え方をしとるんです。そういう大きな能登にとっての喜び、期待とするものをみんなでこれからの生活の中で力にしていこうとすることを表現できるまだらにしたいと思っているんです。

保存会の現状

七尾まだら保存会を後世に受け継いでいく人材を確保して育てていくというのも僕らの保存会の仕事だと思います。そんな人材確保のために保存伝承師制度を作って、2年に1回ずつテストしとるがですよ。このテストで、まだらが好きな人、やってみようと思っている人、挑戦をしてくださいよと言っとるんです。

この6年間の間に、個人233名、団体7つの方々、つまり240人位の人達に保存伝承師という称号を与えてきてるんですよ。どんな人が受験できるのか、どんな人に与えられるのかというと、唄において踊りにおいてその能力や歌唱力に衝撃を受けるとか、一定の技量を持たなきゃならないこと。過去3年間にやっぱり人の前というか、年に3回や4回かは舞台を経験してきたかどうか、そしてこれから将来にわたって継続性を持って活動できる可能性のある人かということで受験させとるんです。保存伝承師の資格を取れば、一応、指導者になれるし、自覚を持ってやってもらえるので、将来に向かって保存と普及のために役立つ。

保存伝承師の233名の方々の平均年齢は50歳以上の年の人が6割位になるかな。若い人で受けにくるのはなかなかおらんわいね。この会を存続させていくときには、若い世代、中間層の世代を入れて、場合によっては女の人を入れる。これからの課題は保存会の中の青年部、保存会の中の女性部として、組織の在り方を変えていかないと駄目なことは間違いないわ。僕のとこの保存会のメンバーといたら34、35名しかいませんが、平均年齢は間違いなく70歳超えてますよ。今、最年長では81か82歳の人がおる。若い人ということになると40歳くらいかな。

この保存会ができて90年の長い歴史の中で、型破りなことをしてはいかんというのが先輩の教えやったけど、僕は伝統的な古めかしいまだらを皆さんにいつまでもさらに愛し続けられ、市民の皆さんに世代を超えて近づいてもらうため



七尾まだらのゆるキャラ七尾君（右）とまだらさん（左）

には、もっと理解しやすいまだらというものをつくってもいいんじゃないかと思って「まだら音頭」というものを3年前につくったんだ。それに、来年が七尾まだら保存会ができて90周年になるんです。その90周年を目標にして1つの節目をみんなで祝いたいということで、まだらのゆるキャラをこしらえたということです。

保存会の歴史

最初は、地区の公民館の役員をしていたので、その時に「青の芽会」という青年団を若い連中ばかりでつくった。時として、地区の青年団として対外的なことをやってくれと言われたことがあった。その時、石川県の会報をつくるコンクールで優勝した。そんなことがあって、地区の何かに取り組もうということになった。それで、まだらに取り組むことになった。

しばらくして、まだらの発表大会にいったん出演してくれんかという依頼があった。この際やから、七尾まだらの小丸山会という名前前で出演させてもらった。それがきっかけで七尾まだらの若手が取り組む小丸山会というものを20歳の時つくった。今思えばまだらをして55年ほど経っている。

本体の七尾まだら保存会の会長さんが亡くなって、そのときに小丸山会と、もう1つの愛好会と七尾まだら保存会の3つが一緒になって保存会の本体をしっかりと立て直そうということになったんです。そして僕が合併した七尾まだら保存会の会長になり、今に至ります。

長さんの思う魅力

まだらっていうのは、1人の音頭取りによって何十人、何百人もの人達が大合唱できるっていう1つの心の和を実感できる。まだらっていうのは、1人の音頭取りによって大勢で歌われるわけなので、合唱が強ければ強いほど舞台はいきります。

僕が目指すまだらの一体化

僕が目指しているということとなると、正調の唄と踊りについて確立することかな。まだら節そのものは基本的には変えませんよ。だけど、踊りはいろいろなグループのオリジナルをどうぞとゆうとるわけですよ。それで、七尾まだらを小学校や保育所へ教えにいとるんですけど、東と西で教えるグループの人が違うんで、みんな自分らのグループの好きな形で教えてくるわけですから、東と西で踊るとる子供らに微妙な違いがありますね、と他の人達に言われるわけや。それはいかかなものかと思ったものだから、正調といわれるまだ

ら節とか踊りのスタイルをDVDを作って本当のまだらの姿はここにありますが、統一された正調のまだらをこしらえておかないと説得力がないからこしらえました。

一本化するまでの道のり・苦労

正調というものを作り上げることは大変やった。芸事というのはみんなそれぞれに主張があって、指導者達にこだわりがあって、なかなか一本化された踊りがなかったんです。でも、いつまでたってもつくりなかつたら駄目だなと。だから、なんとかして6年前に正調というものをこしらえた。そのための話し合いは本当にいさかいごとでした。それだけ正調のまだらをつくるには、お互いに妥協しながらつくる必要性があった。それに、時間のかかることやったけど、なしえてよかったな。

また、芸能の社会というのはうっさいもんで、いろんなグループがあって、私の方が正調なんやというもんがおるんやけど、そういう人達が踊るとのDVDのと比べると違うんです。だから、正調とは簡単に言わせんがです。あくまでDVDに入るとのをきちんと生き写したものでなければ言わせない。芸事というのは、自分こそはというのは、みんなもつとるんだよ。だから、正調というものを他のグループに心掛けさせないと、オリジナルと混同してしまうので、一本化されたまだらを確立することに僕は腐心したというのかな。僕が言うようなきちんとした正調が七尾にあるということについては、どのグループも認めた感じがする。そういう意味では、長い間の懸念であった正調のまだらの唄と踊りを確立できたことが、一つ僕の仕事やったなと思いますね。

地域の垣根を越えて

今年の2月にね、中部と近畿の12県からフォークダンスの指導者クラスの人が220名ほど集まって、七尾まだらの勉強会をすることになったんです。

それで、大阪に集まって講習会をしました。そんなことがきっかけになって七尾まだらがさらに中部圏や近畿圏に飛び火して発展して広まっていく機会になればなと思っとれん。

そういうことで、ここの地域にとどまるまだらにしておきたくないの、地域の垣根を越えて七尾まだらを発信できるということが大きな目的であったわけです。

「里唄」

まだらに取り組むってことは、故郷を大事にする心につながるわね。具体的にね、みんなで声を出し合って喜びのおたけびや大合唱ができるというのはね、心温まるもんですよ。

友情、絆……そんなものが、本当にほのぼのとしたものを感じるな。まだらをやってる人たちのお付き合いはね、本当に壊れないしね、長いですね。取り組んでくれれば、まだらを通じて永遠の友達になれると思うな。それに故郷を大事にする心につながるしね。それをまた仲間と一緒に打ち合わせることができるんや。とにかく、まだらに純粋に取り組んでほしい。

いっぺん七尾で、全国のまだら節がある地域の皆さん方が寄って、まだら節のサミットというか、全国会議というか、そんなものをして皆さんと集まればなと思とるんです。そうするとまだら節を通じて能登観光にも役立つやろしね。全国発信して、地域を超えて、まだらが広がっていくことをそういう意味では僕は期待しているんです。

里山里海が今年のメインタイトルや。僕は市役所にも輪島まだらのほうにも呼びかけとるんやけど、里山里海「里唄」に七尾まだらが名づけられないかと。大きなテーマですよ。まだらというのは、地域になじんだ民謡です。本当は海や山に続いて能登には里唄もあるということにすると、もっともつとこの能登というものが美しい海、豊かな山に続いて、味わいのある地域になじんだ唄もありますよ、ということになればいいなと思っている。だから僕は今から堂々と「里唄」っていうことを言っていきたいと思っています。

〔取材日：2014年8月8日・8月19日〕

PROFILE

長 憲二 ちょう けんじ

昭和14年10月5日・75歳
七尾まだら保存会会長

18歳の頃から七尾まだらに携わり、同年に青の芽会を発足。昭和46年に合併して「七尾まだら保存会」を結成する。平成8年に七尾まだら保存会会長に就任した。現在は七尾まだらを後世に伝承するために、イベントを行うなどの活動を行っている。

